

平成二十六年三月十七日

江戸川柳に「山ざくら詠み人知らぬ人はなし」といふあり。壽永三年平忠度都落ちに際して、和歌の師俊成に「ささなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山ざくらかな」と詠みて撰進中の千載和歌集への入集を果すも、朝敵の身なればとて「詠み人知らず」と書かれける経緯をば今に知らぬ者なきの謂ひなり。この川柳正確なる成立時期分明ならずと雖も、千載集の文治年間より江戸文化爛熟の文化文政頃まで六百年以上経過せる歴史的話題を知らぬ人なしとは今更の如く江戸文化の底邊の廣大なるを思ふ。而してこれを可能とせるは平家物語の他、謡曲「俊成忠度」など口承的作品の力も與りて大なりけりと言ふべし。

寔に歴史を共有するは民族の統一と獨立に不可缺にして、江戸庶民既にかゝる史實に親しみ無意識の内に我が國柄を理解するたればこそ、尊王といひ、攘夷といひ、將た又開國といふを吟味し、以てかの黒船來航以來の難局に處するを得たれ。

然るに戦後高校の社會科教科にては、世界史を必修となし、國史は日本史と稱し選擇科目とす。嘗て教育基本法は「普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造」なる目標を示し、「普遍的」の世界史と「個性的」の日本史とをかく位置附けたるものの如し。平成十八年同法の改正によりこの二律排反的の目標が「傳統を繼承し、新しい文化の創造」と改めらるれば世界史、日本史は平等に必修とし、以て「高校全入」なる教育水準に於ける歴史の共有を圖るべきなり。

こゝに不可解のことを耳にす。曰く、日本史にて近現代史を學ばずと。繩文時代より始めて江戸時代に至れば既に學年末を迎へたりと云々。これ一二に止らず、また世代に偏らず。元來教科の時間配分は教諭の裁量によるものなれば、或る年近現代に至るまでに學年末を迎へたりとて、次の年改善せば、これほどの現象には至らざらまし。

一方最近の若者日本に生れたるを憾み、愧づといふ。これ世界にも類のなき憂ふべき傾向なるも、さしたる對策もなきが如し。思ふに何處いづくに生まるや、如何なる人の子に生まるや、何人も如何ともする能はざるを卻りてこれを愛するは人類固有の高度の感情なり。もし逆にこれを怨むは、必ず人爲の原因あるべく、その一つは我が國近現代史を學ばざるに非ずや。

幕末より明治にかけ、多くの俊秀の志士非業の死をもて維新の大業を成し遂げたる、日清、日露の戦役を勝利してアジア諸國民を激勵せる、然れども第一次大戦後國策免角齟齬を重ね遂に世界を敵として戦に敗れたる歴史、學ぶ者をして千々に懷ひを廻らせしめむ。その上にて「憾み、愧づる」の情に變化生ずるこそ望ましけれ。

今や歴史的事實をさへ無視せる反日プロバガンダ、我が近現代史を學ばざるに乗ぜむとす。危きかな。